

教育新聞

発行 月・木 週2回

発行所 教育新聞社

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-40

代表 ☎ 03(3295)7051

【購読申し込み・お問い合わせ】

<http://www.kyobun.co.jp/>

【購読料・月額】2,500円+税

©教育新聞社 2014

木枯らしにはためく粗末な法衣、寒風に向かって踏みしめるつま先、虚空に向かって放たれる6体の阿弥陀仏。吹きすさぶ京都の辻に鉦を叩きながら一心に念仏を唱え歩く空也上人立像は、鎌倉期における最高傑作の一つであり、世界に誇る日本の宝だと私は思う。

ご存知のように鎌倉期の仏像や絵画は、非常に写実的である。日本にルネッサンスというものがあるとすれば、それは紛れもなく鎌倉時代であり、武士の台頭が日本の美術史に与えた影響はまことに大きい。ところが、若い頃の私は上人像がちつとも良いものだとは思えなかった。貧相な乞食僧がな

六波羅蜜寺に名を残しているにすぎない。その跡地は小中一貫校となり、校庭には馬のいな鳴きならぬ子どもたちの明るい声が満ちている。平家の公達や坂東の武者たちも800年の後に「この地」がこうなることは夢にも思わなかったであろう。

さて、空也さんはその近くに立っておられた。思ったより小さいなどというのが最初の印象だったが、すぐにき付けとなった。およそ1千年という時を超え、心の救済をひたすら祈る「この人」の気迫が直接伝わってきたのだ。空也像がなぜ教科書や副読本に取り上げられてきたのか、その意味が

とが必然的に産みだした産物ともいえよう。作者は不世出の大仏師運慶の子康勝(こうしょう)である。彼は仏像ではなく「人」を彫ることによって仏法を表した。このように一体の像から民衆派仏教のこと、像が造られた当時の社会や鎌倉という時代の精神性と文化までをも読み取ることができたのは、作者の技術と心が体現された「ホンモノ」だったからである。しかし、本物は名品や至高の作品に限らない。近くの資料館に展示されている生活用具や土器・石器、あるいは証文の類まで、心を澄ませてよく見れば、時代背景はもろろんのこと、作者が使った人の想いが必ず伝わってくる。

子どもの多様な見方を生かす 社会科授業

玉川大学教育博物館研究員・玉川大学講師

多賀 譲治

第5回

ホンモノから学ぶことの意味

にやら奇妙な仏を口から出している「奇怪な像」としか映らなかったのだ。当然のことながら子どもたちにその像の持つ意味を伝えることはできなかった。

平家一門の館が建ち並び、後に鎌倉幕府の出先機関として200年にわたり西国武士の拠点であった六波羅の地名は、一本の通りと

清盛座像を見るつもりで六波羅蜜寺に立ち寄った。経巻を持ち優しい眼差しで相国入道は思ったとおりの佇まいで、傲慢、源家の宿敵というイメージはなく、清盛本来の姿を私たちに伝えている。この像が清盛生前ではなく鎌倉時代に作られたということも興味深い。

分かった瞬間であった。ひたすら「南無阿弥陀仏」を唱え、救いを求める空也は称名念仏の先駆者だが、生涯教団を持たない孤高の人であった。しかし、その影響は後の法然や親鸞、さらに踊り念仏で諸国を遊行した一遍にまで及んだ。像は庶民に広まった鎌倉仏教と当時勃興した写実主義

見る眼が育つとは心が育つというところで、そうした経験が教師の力となり学習の深まりに通じるのはいつまでもない。